

はじめに 1

I 日本人口の高齢化 1

1 人口の高齢化とその要因 1

2 人口高年齢化の地域別傾向 1

II 人口変動要因の変化 35

1 出生率・出生力の変動 35

2 死亡数・平均寿命の変動 41

III 人口高齢化の将来 44

1 全国人口の将来動向予測 44

2 地域人口の将来動向予測 44

3 世界人口の将来動向予測 44

IV 老年人口と若年の要因との地域別関係 44

V 高齢者別人口の平均規模に関する主要統計表
(国勢調査結果による)

日本人口の高齢化とその要因の変化

— 国勢調査結果を中心として —

山口喜一（東京家政学院大学教授）

1 9 9 4

財団法人 地域社会研究所

はじめに

この稿は、わが国人口の高齢化とその要因である出生・死亡などの変動について、国勢調査その他の統計データにより考察した結果を資料的に示すものである。

いわゆる「人口の高齢化」とは、総人口における高年齢人口の相対的拡大を意味する。最も一般的に用いられる概念は、総人口中に占める「老年人口」の割合が増加することである。したがって、それは老年人口の増加とは異なった概念であって、例え老年人口が増加しても、必ずしも人口の高齢化が起こるとは限らない。戦前における日本人口の年齢構造の変動傾向は、この間の事情をよく物語っている。

明治初期から第2次大戦前に至るわが国人口の年齢構造の推移は、年齢3大区分別にみて、15歳未満の年少人口が絶対的にも増加し、65歳以上の老年人口は絶対的に増加したけれども、その増加は緩やかであって、相対的にはその割合（老年人口年齢構造係数）を著しく低下し、この意味で、老年人口は増加したが日本の人口は若返ったといつてよい。つまり、戦前においては人口の高齢化は全く経験したことがなく、それは戦後に始まった未経験の新しい事実であるといえることができる。

人口の高齢化ということは、人口学的に言えば、人口の年齢構造変動の一つの局面であるということである。人口の年齢構造は、結局、過去における出生と死亡とのバランスによって定まる。例えば、現在65歳の人口は、65年前の出生と、出生後65年間において、絶えず変動した0歳から64歳までのその時どきの死亡率の適用を受けて、現在65歳で生存している人口である。

65年前の出生集団を、65年前の“コーホート(cohort)”といい、過去65年間、このコーホートに働いた死亡率を「コーホート死亡率」といつている。一つの人口の年齢構造は、こうしたコーホートの集合であるといえる。このように、人口の年齢構造は過去1世紀にわたる出生と死亡とのバランスによって定まるのである。また、反対に、出生や死亡は人口の年齢構造いかんによって影響を受けることになる。

出生時の平均余命、すなわち一般にいう「平均寿命」は、人口の生存期間（換言すれば死亡の状態）を最も簡約に表わす指標であるが、その長足の伸長にみられるごとく、戦後における死亡率の低下は著しく、老年人口の急速な増加となって現われている。すなわち、65歳以上の老年人口は昭和25（1950）年に400万を超え、その後も次第に増加して55（1980）年には1,000万を超え、近年では1,500万を数えるに至った。この間の約40年間における老年人口の増加率（1年平均にしてみても）は、総人口のそれ1.0%に対して3倍余の3.2%を示している。

戦前の大正9（1920）～昭和10（1935）年においては、総人口の年平均増加率1.4%に対して、老年人口のそれは0.6%で2分の1にも達しなかった。今後、老年人口の増加は加速度的で、平成3（1991）年に1,500万を超え、西暦2000年には2,170万となると予測される。今世紀末10年間における総人口の推定年平均増加率0.3%に対して、老年人口のそれは、実に10倍を大きく超える3.8%に上るとみられる。

戦後のわが国死亡率の低下は著しいものがあつたが、出生力の減退もまた著しかった。女子の出生力を簡約に表現する指標に合計特殊出生率があるが、これで見ると、現在の出生力は戦前の3分の1である。ことに昭和25～35（1960）年間の減退は、外国にも前例のないような急速度なものであつた。こうして、戦後、日本では加速度的な人口の中高齢化が進行してきた。すなわち、昭和25年に総人口の4.9%を占めていた65歳以上人口は、

45（1970）年には7.1%に達した。更に、最近では13%台に上昇しており、その2倍の水
準に達するのも時間の問題である。

老年人口係数が7%から2倍の14%へと上昇するのに要する年数は、わずかに25年ほど
であって、欧米先進国に比べて著しく短く、わが国の人口の高齢化が極めて急速に進行し
ていることを示している。このように、わが国の人口高齢化の速度が国際比較からみても
急速だということは第1の特徴であるが、第2の特徴は、老年人口係数が極めて高い水準
にまで上昇するとみられる点にある。すなわち、西暦2000年に17%という、現在の先進諸
国の最高水準に追いつくだけでなく、更に2020年ころには、それ以上の世界に類例のない
25%台という高さに達すると見込まれているのである。

以上のように、わが国人口の年齢構造は、年少人口の絶対的、相対的縮小と高年齢人口
の絶対的、相対的増大とによって、人口高齢化の道を急速に進んでいるのであるが、年齢
構造係数以外の指標、すなわち平均年齢、従属人口指数、老年化指数等の推移をみても、
それは明らかである。以下、国勢調査の結果を中心として、それらの各指標と関連データ
を子細に観察し、その結果を高齢化社会ないし高齢社会（それはまた「少子社会」でもあ
る）問題考察の資料として提示したい。